



# 急転する朝鮮半島情勢 冷静な観察と分析必要

高原 明生  
たかはら あきお  
(東京大公共政策大学院長)

今から30年ほど前、1980年代末から90年代初めに  
かけて世界は大きく転換した。冷戦の、ベルリンの壁の  
崩壊と東欧の体制転換、そして米国のハイテク軍事技術  
を見せつけた湾岸戦争。やがてソ連邦が解体し、東アジ  
アでは日本の膨張した経済バブルが破裂。いわゆる天安  
門事件を起こして一旦は保守化した中国は、やがて計画  
経済の看板を下ろして一党支配体制下での市場化と対外  
開放に本格的に乗り出した。

こうした事態は、多くの戦後生まれが経験したこと  
のない速さで進んだ。世の中の動きに頭が追いつかずに、

新聞を見ても情報の渦に溺れそうな無力感を抱いたこと  
を覚えている。

## 冷戦構造崩壊の30年前を想起

当時ほどではないかもしれないが、現下の国際情勢の  
転換も冷戦構造が崩れた頃をほうふつさせるような速度  
で進んでいる。大局的には米中関係の悪化が著しい。安  
保面での競争激化に加え、厳しい通商協議がしばらく続  
く見込みだ。そして年初以来の朝鮮半島情勢の展開は目  
まぐるしい。

元日に北朝鮮の朝鮮労働委員長が「国家核武力」の完成を宣言した後、2月の韓国・五輪の開催を奇貨として南北朝鮮の交流が活性化した。女子アイスホッケーの合同チームが結成され、北から来た応援団は韓国内で注



手を取り合って軍事境界線を越える北朝鮮の金正恩朝鮮労働委員長（左）と韓国の文在寅大統領の板門店で4月27日、韓国共同写真記者団

目を集め、人気を博した。軍事的な緊張が続く中で、委員長は五輪開会式に最高人民会議常任委員長とともに妹の党第1副部長を派遣し、大統領は2人を歓待した。

それに続いて、3月上旬に文大統領は特使を平壤に派遣し、4月下旬の南北首脳会談を決定。金委員長からの呼びかけを伝えられた米国のトランプ大統領は米朝首脳会談に応じることを即断した。事態の展開を受け、3月下旬に金氏は夫人を帯同し北京を突然訪問。7年前に最高指導者になって以来、初の外遊である。その1カ月後、金氏は板門店の軍事境界線を越え、韓国に入った初めての北朝鮮最高指導者となった。

### 蚊帳の外嫌った習近平中国主席

事態が動いた要因は何か。かつてないほどの緊張の高まりの中で、軍事衝突を避けなければならないという思いが募ったことをまず挙げることができよう。トランプ大統領は前任のオバマ氏らと異なる対応を取りたがる人物であり、武力行使も選択肢に含まれることを強く示唆していた。

さらには、経済制裁が効果を及ぼした可能性も否定できない。金氏の指導の下、北朝鮮では経済の規制緩和が進み、全体的な経済状況は改善されてきたと言われる。だが、中国も賛同した制裁措置の強化は、次第に目に見



高原 明生（たかはら・あきお）

1958年生まれ。東京大法学部卒。英サセックス大で博士号。桜美林大助教授、立教大教授などを経て現職。新日中友好21世紀委員会日本側秘書長を務めた。専門は現代中国政治。共著に「開発主義の時代へ 1972—2014（シリーズ中国近現代史）」。アジア・太平洋賞選考委員。

える変化をもたらした。国境を越える物資が減り、北朝鮮が中国で経営するレストランが店を閉じて労働者が次々に帰国した。石炭の輸入制限に始まった中国の制裁措置が実効性を持ったからこそ、中朝のメディアの間で激しいのしり合いが起きたのだろう。

中国の習近平国家主席は韓国の大統領とは何度も会談しているのに、北朝鮮の指導者とは会ったことがなかった。

金氏が中国の反対を無視し、核・ミサイル開発を急いで安全保障環境を悪化させたことを、習氏は快く思っていないかった。それがなぜ打って変わったか。金夫妻を大歓迎したのか。

習氏によれば中国は「世界の舞台の中央」に近づいており、そのためにも隣国との良好な関係は重要だ。その上、

北朝鮮は今や世界で数少ない社会主義国であり、中国共産党が長年にわたって支援してきた相手でもある。南北に続き米朝の首脳会談が行われようとしている現在、蚊帳の外に置かれるわけにはいかない。

金氏の訪中では、朝貢秩序的な関係を連想させるような情景も見られた。中国側のテレビ報道映像には、首脳会談の際、習氏の話聞きながら金氏がメモを取る様子が映された。朝鮮側が製作した金氏訪中の記録ビデオには巨大な花瓶や酒、寶石など習夫妻からの多種多様な贈り物が映っていたが、香港紙によると合計4000万円以上の価値があるという。

### 核廃棄実現まで経済制裁継続を

金委員長は、孤立無援の状態から一気に形勢逆転に成功した。習氏との関係はトランプ氏との会談に臨む上で重要な支えになる。虎穴に入らずんば虎子を得ずと言わんばかりに大胆に相手の懐に飛び込み、メロまで取ってみせるしたたかさは、恐るべきものがある。また南北首脳会談Ⅱでは宣言書の署名に当たり韓国側の準備したペンを使わない警戒ぶりを示す一方で、巨体を揺すって笑顔を振りまき、多くの韓国人に親近感を持たせることに成功した。

もちろん、非核化が進むかどうかは米朝首脳会談にか

かっている。核廃棄の検証と北朝鮮の体制保証への信頼が鍵となる。金氏は、非核化に同意したりリアのカタフィ氏の末路「2」を忘れていない。マクロン仏大統領の努力にもかかわらず、トランプ大統領はイランとの核合意からの離脱を表明しており、それが北朝鮮との交渉上ブラスになるとは思えない。

中朝首脳会談後、両国間の経済交流が再び活発化し朝鮮労働者も中国に戻り始めたと報道されている。9日に東京で開かれる日中韓首脳会談では、核廃棄が実現するまで経済制裁の手綱を緩めないことを確認すべきだろう。「昨日の敵は今日の友」が普通に起きる世界情勢。したたかな日本外交を展開するには、冷徹な観察と分析、そして国民の理解と支持が必要となる。

◆東西陣営対立の残滓

1989年の東欧革命とベルリンの壁崩壊の後、米国のブッシュ大統領とソ連のゴルバチョフ共産党書記長はマルタ会談で冷戦の終結を宣言した。ペレストロイカ(改革)の進展と冷戦の終結は、ソ連の国家統合力を失わせ、91年に解体した。一方米ソが分割占領し、朝鮮戦争の舞台になった朝鮮半島は、冷戦構造が今も持続する。東西陣営対立の残滓ともいえる朝鮮半島情勢はどう動くのか。事態の急転に日本の一手は――。

■ことば

◇1 南北首脳会談

韓国の文在寅大統領と北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長は4月27日、板門店の韓国側施設「平和の家」で会談し、「板門店宣言」に署名した。宣言骨子は、完全な非核化を通じ、核のない朝鮮半島を実現する共通目標を確認▽年内に朝鮮戦争の終戦を宣言し、休戦協定を平和協定に転換▽米中を交えた多国間の枠組みで、平和体制構築に向けて協議▽北朝鮮の開城に南北共同連絡事務所を開設▽文在寅大統領が今秋、平壤を訪問。

◇2 カダフィ政権崩壊

リビアのカダフィ大佐は2003年、米英両国との交渉を経て、核を含む大量破壊兵器の放棄を宣言した。米国などの経済・軍事的圧力による国際的孤立を回避しようとしたとみられる。カダフィ氏は11年に米欧が支援する反政府勢力によつて殺害された。専門家の間には、リビアの例が示すように、米国には他国の独裁政権を破壊する力があり、金正恩政権は核を放棄すれば体制維持はできないと考えているとの見方が根強い。